

# なぜ、進学移動するのか

## —佐渡出身の学生を対象とした事例研究—

河原 秀 行

### 1. 問題設定

地方の高校生の進学について論じた研究は多く、そのほとんどは教育機会の地域間格差について扱ったものである。一口に教育機会の地域間格差とは言っても、その着眼点は教育機関の収容力(率)、階層、大卒者の高卒者に対する相対賃金など多様であるが、いずれにしてもそこでは、地方からの進学が困難を伴うということが指摘・問題視されている。

そうした困難のうちの一つは、地方における教育機関の収容力(率)が低いことに起因する、地理的移動である。ほとんどの場合、地理的移動は多大な金銭的負担を伴う(中澤 2011)ため、その負担能力・負担感の程度によって、進学を諦める場合があることは想像に難くない。また、金銭的負担のみならず、地理的移動に対する心理的抵抗感も進路選択に影響を与える(石戸谷 2004)。進学することが地理的移動を伴わざるを得ない、という地方部の条件が、地方からの進学を困難にしている一つの重大な要素となっている。

上記のことは先行研究でも指摘されてきたことであるが、一方で、その困難を強調してきたが故に直面する新たな問題がある。それは、「なぜ、困難を伴うにもかかわらず、進学移動<sup>1)</sup>をするのか？」という問題である。もちろん、地理的移動に伴う金銭的・心理的負担を考慮しても、進学に経済的意義を見出して進学をする層がいることは既に指摘されている。例えば朴澤泰男(2016)は、大学進学によって受ける便益の見込みの地域間での差が、県外進学(朴澤は県外進学を、地理的移動を伴う進学とほぼ同義で用いている)に影響を与えることを論じた。石黒格ほか(2012)も、都市へ進学移動することによって便益を受ける層の存在を明らかにした。確かにこうした層は、地理的移動にまつわるコストも、将来に対する投資の一環とみなして、進学行動を取るだろう。

しかし、石黒ほか(2012)はまた、地理的移動によって経済的便益を受ける者は、「相対的に「上位の」大学に進学した場合だけ」(石黒ほか2012:262)、すなわち高学校歴者のみであろうことも、同時に指摘している。地域移動の便益と学校歴との関係について扱った研究はあまりないが、就職における学校歴の影響力の大きさについては多くの先行研究によって指摘されているところ(濱中 2007; 平沢 2011など)であり、石黒ほか(2012)の指摘の妥当性は高いと言っていいだろう。他に、富江英俊(1997)も、成績が低い高校生において「無理して進学しなくても、自分には家も土地もあるから食いつぶれることは無い。だから地元で就職する。」といった選択が働いていることが予想される」(富江 1997:152-3)とし、成績が低い層(すなわち、高い学校歴を得にくい層)に働く非進学への誘因を示唆しているし、「社会的な自己実現」(有海 2011)や「難関大学志向」(荻谷ほか 2007)などが地方からの進学を後押しするという知見はあるものの、対象者は進学校の生徒のみに限られている。地方県の人口移動の構造について論じた吉川徹(2001)も、主な関心は「エリート」であるため、調査対象を進学コースの生徒に限定している。

すなわち、高い学校歴を取得しにくく、進学移動による経済的便益を受けにくい人々が地理的移動というコストを抱えながらも進学する理由は明らかになっていないのである。しかしながら、4年制大学・短期大学への進学率は5割強に達し、専門学校を含めれば進学率は7~8割にも達する今、相対的に少数である高学校歴者にのみ注目して進学行動を論じるのは妥当ではない。地方の高校生が置かれた状況をより正確に論じようとするならば、相対的に多数である学校歴が高くない人々にも注目することは不可欠である<sup>2)</sup>。

よって本稿は、進路選択主体の学校歴の差異を意識しながら、地方の高校生が「なぜ、困難を伴うにもかかわらず、進学移動をするのか」という問いに答えることを目的とする。

## 2. 方法と対象

### 2.1 方法と対象

本稿の目的は、地方出身の学生の、進学移動に対する主観的な意味付けを明らかにすることにある。そこで、当事者の主観に沿って分析・考察を行うべく、調査には半構造化インタビューを用いた。対象は、新潟県佐渡

市（＝佐渡島）出身の大学生2名と専門学校生1名の計3名で、彼（女）らは、平成27年度佐渡市成人式にて配布したアンケート<sup>3)</sup>中でインタビューへの協力意思を示した者（全員）である<sup>4)</sup>。佐渡市出身の学生を対象とするのには、大きく分けて三つの理由がある。

第1に、佐渡島は、その離島<sup>5)</sup>という地理的特徴ゆえに、実態としての活動区域が島内である程度完結しているために、地理的移動を扱いやすいことである。従来の研究では、県外／県内などを移動有無の代理指標として用いなければならなかったが、それは実態とは一致しない。しかし、島内から島外への通学・通勤、またはその逆はほぼ不可能であり、進学と移動の関係が追いややすいのである。これは分析上都合が良いというだけでなく、進路選択主体やそれに影響を与える主体も、島外への進学が移動を伴わざるを得ないという不利な環境を認識しやすいため、そのことが進路選択に与える影響を大きく受けていることが予想され、このことは調査主旨上好ましい。

第2に、これも離島であるということに起因する点であるが、離島は、地方部が抱える困難がより顕在化する地域である、ということが挙げられる。特に経済的負担に関して具体的に見てみよう。佐渡から本州への移動には、2017年12月現在、最も安い船・航路であっても片道の大人料金は2,250円かかる（佐渡汽船 2017）上に、車両を運搬するには追加料金（四輪車であれば、最も小型のもので片道10,040円）が必要となる。このように、島外への移動には（短期的・一時的なものも含め）多大な経済的負担が伴う。地方の問題として一括して語られがちな経済的負担という側面が、かなり強力で働くのが離島なのである。実際、本稿の対象者の一人である神野さんも「佐渡を出られるだけのお金がない人とかがたくさんいる」と語っており、その負担の大きさは佐渡出身者にも認識されている。また、最安値の船・航路であれば本州まで2時間半かかるため、心理的抵抗感も大きいだろう。以上のことを踏まえれば、「困難を抱えつつも進学移動をする層」に着目する本稿が、地理的移動の困難性の大きな地域出身者に注目するのはごく自然なことと言える。

第3に、佐渡市には高等教育機関<sup>6)</sup>が存在しない一方で、専門学校は3校ある（佐渡看護専門学校、佐渡保育専門学校、伝統文化と環境福祉の専門学校）。すなわち彼（女）らは、ポスト中等教育機関であれば、移動せずに進学するという選択肢を持っている。にもかかわらず進学移動する、い

わばより「不可解」な層に焦点を当てられるのである。

## 2.2 対象者の位置づけ

分析・考察に入る前に、佐渡市出身の若者全体の進路状況と、調査対象者の位置づけを確認しておこう。表1は、2016年度に佐渡市内の高校を卒業した者の進路である。

表1 佐渡市の高校卒業者の進路(2016年度卒)

国公立大学	私立大学	短期大学	専門学校	就職	その他	計	総数
14.2%	23.7%	4.1%	36.9%	15.1%	5.8%	100.0%	464

佐渡市所在の各校ホームページ<sup>7)</sup>より筆者作成

これを見ると、専門学校進学者が最も多くなっている。さらにその内実を見ても、専門学校進学(171名)のほぼ9割が島外の専門学校に進学しており(153名)、移動を伴う進学行動を扱うにあたって、専門学校進学者を対象とすることの重要性がわかる。またこの表から言えるのは、4年制大学・短期大学進学率が42.0%と、日本の高校卒業生全体の大学等進学率である54.7%(文部科学省 2017)から大きく離されている一方で、専門学校進学者は日本全体の16.2%(文部科学省 2017)を大きく離しているため、ポスト中等教育機関も議論の射程に含めれば、地理的移動に伴うコストの大きさが教育機会の地域間格差を説明するとは思われないことである。このことから、進学移動がいかなるものとして捉えられているのかを明らかにすることの重要性が示唆される。

次いで、調査対象者の位置づけを確認していく。調査対象者は高野彩さん、古賀明弘さん、神野拓海さんの3名(全て仮名)であり、調査時点(2015年10月)では、3名とも首都圏の学校に通っていた。通っていた学校は、高野さんは受験偏差値が60である(旺文社 2017)国立大学、古賀さんは声優養成系の専門学校、神野さんは受験偏差値が40.0~47.5(旺文社 2017)と、選抜制の高くない私立大学である。

学校歴の差異に注目する本稿において、彼(女)らの学校歴の高低は重要な点である。学校歴の高低は相対的なものであり、それを分ける基準を明示することは難しいが、本稿では石黒ほか(2012)が「受験偏差値で大学をランク付け」している(石黒ほか 2012:262)こともあり、ひとまず受験偏差値によって判断することにし、それが60以上である大学を高い

学校歴としてみることにする。定義上、受験偏差値が60以上とは全体の上位16%以内ということであり、その学校歴が高いことは疑いえないだろう。これを本稿の対象者に当てはめれば、高野さんが高等学校歴者、古賀さん・神野さんが非高等学校歴者となる。もちろん既述の通り学校歴は相対的なものであり、上記が不適切な区分である可能性に留意する必要がある。しかし結論を先取りすれば、高野さんと、古賀さん・神野さんの間には進路選択の語りにも明確な差異があるため、ある程度妥当な枠組みであったように思われる。

### 3. 進路選択過程の記述

本章では、以上のことを踏まえて、調査対象者の進路選択の過程を簡潔に記述していく。

#### 3.1 高野彩さんの進路選択

高校時代は「典型的な文系で、国語と英語はまあ割とできるほうでしたけど、他の化学とか数学とかはボロボロ」だった。勉強そのものも好きではなかったが、英語が得意だったということもあり、「最初から国際系の大学には行こうと思って」いたと言う。その他、「具体的に何をしたいとかそういうのは特になかったけど、どうせ行くんだったらレベル高いほうがいいかな」という思いと、「なんとなく」あった東京に行きたいという思いから、高校2年生に進級する前後に、現在所属している難関国立大学を志望するようになった。

進路については「だいたいみんな応援してくれた」と言う。むしろ、受験偏差値が高い国立大学ということもあって、親からは「絶対行けよ」というような「プレッシャーじみた応援」さえもされたそう。その一方で、ご両親は長女が一人暮らしすることに対して心配もしていたようで、「定期的に連絡はしてね」などと言われたらしい。本人は地元を離れて一人暮らしすることについては、「楽しみでした。あこがれもありましたし」と言う。

#### 3.2 古賀明弘さんの進路選択

当初は、老人ホームで働いている母からの勧めもあり、看護学校をはじめとする医療・看護・介護等の方面に進学することを考えていたが、そう

した進路に対し「なんか違うなとも思って」いたらしい。そうした中、「初めてアニメをラジオで聞いた」時に「すごく面白かったんで、俺。声優になりたいなと思って」、声優養成の専門学校を志望することになった。親も声優への道は険しいことは十分に理解しており、「最初は少し反対された」が、母が昔やりたいことが出来なかったという後悔をしていることもあり、最終的には「若いうちだから行けや、みたいな感じに」なったと言う。学校の先生にも「いい顔はしませんでしたけど、ダメっていうのもおかしいから、ちゃんと、力添えはするよって」言われるなど、最終的には応援をしてくれた。そうして無事に、首都圏の志望校に進学を決めた。

### 3.3 神野拓海さんの進路選択

高校時代は、エンターテインメント関係と保育の二つに興味があり、どちらに進学をするか悩んでいた。しかし、最終的には「保育行ったら、保育士になって、まあまあ、順風満帆というか、普通に真面目なんで、保育士になれるだろうなと思ったんですけど、なんか、ずっと、退屈なんですよ、佐渡。なんか、変わらないなと思って」、また「アニメの方がなんか、かかわりたいなと思って」、そして親に「頼りたくない」という思いから、東京のエンターテインメント系の分野に進学を決めた。父はかつて東京の大学を卒業したこともあり、積極的に応援してくれたが、はじめのうち、母は東京に出ることに反対したという。しかし、最終的には母もその道を応援してくれた。

## 4. 「やりたいこと」と進学移動

さて、3人の進路選択を見た上で、彼(女)らの進学移動への意味付けを見てみよう。

### 4.1 進路選択における「やりたいこと」志向

まず指摘することが出来るのは、古賀さんと神野さんは「やりたいこと」への志向性が強いということ、そして周囲もそれを支持していたということである。声優という、実現が困難であると思われる「やりたいこと」を希望した古賀さんにおいてすら、声優学校に進学することをためらわず、親や先生も「最初は少し反対」したが、最後には追認した。彼は進

路選択を語る際、居住地に直接的に言及をすることはなく、声優になるために東京に行くという、手段的な居住地選択を行っていた。神野さんも同様に「アニメの方がなんか、かかわりたい」という「やりたいこと」志向に基づき、東京の大学に進学を決めた。

「やりたいこと」あるいは「やりたいこと志向」は、現代の若者の進路選択・キャリア形成を扱う研究において、一つのキーワードである。「やりたいこと」(鈴木 2005)や「やりたいこと志向」(岩田 2010)などのように、口語的で直接的な表現が用いられる場合もあれば、「自己実現志向」(荒牧 2002)や、特にその個人化された動機を強調して「個人的な自己実現」(有海 2011)という表現がなされる場合もあるが、いずれにせよ、その内容は「自らの興味・関心や内発的な動機づけにしたがって物事に取り組むこと」(荒牧 2002:6)、あるいはその志向と言えよう。彼らの語りからは、上記のような、「やりたいことをやる」という、進学への意味付けが行われている様子が明らかとなった。

一方で、高野さんは「具体的に何をしたいとかそういうのは特になかった」が、「東京に行きたいなというのはあって。なんとなく」と語っている。また、地元を離れて一人暮らしすることについても、「楽しみでした。あこがれもありましたし」と言っている。彼女の場合は、東京に行きたいという漠然とした思いが直接的に志望動機として語られ、「やりたいこと」が必ずしも強く機能していない。それどころか、「どうせ行くんだったら」という語りからわかるように、もはや「行く」ことは自明の前提とされている。

#### 4.2 「やりたいこと」を語る者は、本当に「やりたいこと」を志向しているのか？

こうした神野さん・古賀さんと、高野さんの間での差異を生じさせるものについて考える前に、「やりたいこと」を進学動機として語っている古賀さん・神野さんが、本当に「やりたいこと」志向に基づいて進路選択をしているのかどうかについて、考えてみたい。そのため、進学の動機について直接的に語っている、以下の二つの語りに注目する。

古賀：ももとは、全然そういうとこ(声優養成の専門学校)行く気なくて、あの、介護学校に行こうと思ってたんですよ。あの、

老人ホームとか、そういう。まあ佐渡老人ばっかいるんで、あと、お母さんが老人ホームで働いてるんで、まあそこいけばいいんじゃないかとかも言われましたし。歯医者、あの、歯の治療する人じゃなくて、金型取ったりする人もいいんじゃないかとか言われました。どっちかという医療系を勧められてたんですけど、まあそれでもいいかなと思ってたんですけど、なんか違うなとも思ってたんですよ。でまあ、なんかなと思いがたから、アニメのラジオを聞いたんですよ。初めてアニメをラジオで聞いたんですけど、すごく面白かったんで、俺、声優になりたいなと思って。

神野：保育に入ったら、保育の選択しかないわけじゃないですか。てことは、まあ東京にも出てこれるけど、(佐渡に) 戻ることになりそう、かなと

——：(佐渡以外にも保育の仕事はあるので) そうでもないんじゃない？

神野：まあそうですね、まあ保育でもいいんだけど、アニメの方がなんか、かかわりたいなと思って、表現学部。勧めてくれたのは父親なんですけど。すごい迷ったんですよ。もちろん、保育行ったら、保育士になって、まあまあ、順風満帆というか、普通に真面目なんで、保育士になれるだろうなと思ったんですけど、なんか、ずっと、退屈なんですよ、佐渡。なんか、変わらないなと思って。

この二つの語りは、どちらも佐渡に専門学校があり、就職先も佐渡島内にある(と彼らは認識している)、すなわち佐渡で実現可能な選択肢である「介護・医療」系、そして「保育」の進路を考えていたが、それをやめ、佐渡で実現不可能な選択肢である「声優」、「アニメ」への志望を決意した経験についての語りである。ここでは、「佐渡老人ばっかいるんで」や「ずっと、退屈なんですよ、佐渡」という語りに示されているように、「介護・医療」系へ、あるいは「保育」へ歩を進めることは、佐渡で居住することと直接的に結びついている。しかし、インタビュアーが尋ねているように、佐渡でなくとも保育や介護・医療系の学校・職業はあるのであ



り、それらへ進学することが直接的に佐渡で居住することと結びつくわけではない。にもかかわらず、彼らはそれらを強く同一視している。

ここから示唆される仮説は以下である。すなわち、彼らは、何か特別な理由がないと佐渡を出られない状況にあり、かつそこから抜け出したいと思っているのではないだろうか。

佐渡を出るということは、既述の通り経済的負担を背負うことになる上、非高等学校歴者であれば、将来的に経済的便益を受けることも期待しにくい。また、Uターンしない場合は地域社会や家族資産の世代間継承の失敗にもつながりうる(山下 2012)。よって自身もその必然性を感じにくいし、周囲からも反対されやすい。そこで、それを正当化するために用いられるのが、「やりたいこと」なのである。もちろん、古賀さんも神野さんも、声優やアニメが「やりたいこと」なのは偽りなき思いだろう。しかし、古賀さんは声優という「やりたいこと」を見つける前から「なんか違うな」と思っていたし、神野さんがアニメ系に進学することの決め手は「なんか、ずっと、退屈なんですよ、佐渡。なんか、変われない」ということのようにも思える。彼らが「介護・医療」や「保育」に「やりたさ」を見出せなかったのは、それらが都市への移動と結びついていなかったからではないだろうか。そしてだからこそ、移動を伴う「やりたいこと」を強く志向したのではないだろうか。

すなわち、進路選択主体が移動により経済的便益を享受できない者(≡非高等学校歴層)である場合、経済的コストを伴い、地方衰退につながり、家族や知人からも離れてしまう進学移動という選択は、それが佐渡では実現不可能な「やりたいこと」と結びつけられて説明される時に、はじめて許容される、ということである。このことは、二人の周囲の様子からも伺える。神野さんの父は、かつて首都圏の大学に通っていたこともあり、首都圏への移動を勧めたが、母は強く東京への移動に反対していた。古賀さんの母も、介護や医療など、佐渡で実現可能な進路を勧めていた。しかしどちらの母親も、息子が「やりたいこと」を見つけ、それに向けた志望を固めると、最後には「やりたいこと」だから、という理由で息子の地理的移動を許容したのである。古賀さんの先生も、ほぼ同じ形で、最終的には応援をした。このように、「相対的に「上位の」大学に進学」しない(できない)者の地理的移動は、「やりたいこと」を伴っていなければ許容されにくいのが、逆に言えば「やりたいこと」と結びついていれば許容される

のである。そしてそれゆえに、彼らの「やりたいこと」は、都市への移動と結びついている必要があった。

このような考察を踏まえれば、高野さんが「行く」ことを自明視していたことに対しても整合的な解釈が行える。高野さんは学校歴が高いため、東京へ移動することが経済的に合理的であり（石黒ほか 2012）、そのために、移動することが必ずしも「やりたいこと」を伴う必要がなく、故に「やりたいこと」志向が強く働いていないのである。このこともまた、高野さんの周囲の様子からも伺える。高野さんは、高校1年生の後半から2年生頃には既に移動を決めており、「具体的に何をしたいとかそういうのは特になかった」にもかかわらず「だいたいみんな応援してくれた」という。それどころか、「なんか、絶対行けよみたいな」「プレッシャーじみた応援」さえもされたとのことである。難関国立大学のような、相対的に「上位の」大学に進学する（できる）者の地理的移動は、それが「やりたいこと」と結びついていなくても、強く自明視されているのである。

## 5. なぜ、地理的移動を希求するのか

では、彼（女）らはなぜ、地理的移動を希求しているのだろうか。これに関して、3人の地域への語りから考えてみたい。

### 5.1 地方への不満・不安

3名が共通して語ったのが、佐渡の利便性への不満である。高野さんは、「ほしいものがすぐ手に入らなかったりする」ところや「（電車がなく、移動手段がバスなので）車を持っていないと、交通費がすごくかさむ」ところなどを挙げ、「住んでるときは、割と不満しかなかった」と語る。古賀さんも、「船しか便がないっていうのも不便ですよ。ね。（中略）もうちょっと運賃とかも安くしてほしいなとかって思いますし、シケとかが来たら、もうなんにもありませんから、スーパー行っても」と、交通やそれに起因する不便を語り、神野さんも「電車もないし、映画館もないし、他に遊ぶ場所、ゲームセンターもない」とした上で、「なんもない」という評価を佐渡に下している。学校歴・学歴の如何にかかわらず、地方は不便な場所として認識されているらしい。

また、利便性のほかにも、高野さんが「安定した職業といたらもう市役所くらいしかないんじゃないか」と語り、神野さんが「まあでも人口多

くないと経済回らないですもんね。(中略)でも、ほんとに佐渡はリピーター来ないし、商店街もシャッター下がってる」と語るように、就労を含む経済活動全般に対する不安感も語られた。以上のような、利便性や経済活動などに対する不満・不安が、地理的移動を希求させる一因であるだろう。

## 5.2 地方居住者との差異化

その他、古賀さん・神野さんが共通して語ったのは、佐渡居住者をメリトクラシー原理下で「下」に位置づけるものである。例えば古賀さんは、佐渡への語りの中で、以下のように述べている。

これ勝手な考えですけど、佐渡にいるやつらは馬鹿なやつなんだろ  
うなあって、普通に思ってます。下に見てるってわけじゃありません  
けど、やっぱり、下に見てるとは、俺、自分で客観的に感じます。

具体的に説明を求めると、「俺らの代ですぐ就職するやつ」は「バカの集まりで、まあ素行の悪い奴ら」であり、「そいつらが就職して佐渡に集まる」ということらしい。また、神野さんも、佐渡について、以下のように語っている。

東京みたいに、プロフェッショナルがプロフェッショナルじゃないん  
ですよ。佐渡はプロフェッショナルにしなくても、生活ができるし、  
そこにいれば。その、上に行こうっていう情熱が、あんまり持てない。

ここでは、佐渡に住む人は「プロフェッショナルじゃない」とされており、「上に行こうっていう情熱」を持たない(すなわち「下」の)人として位置づけられている。神野さんはまた、「佐渡で友達といたら、平凡かもしれないけど、そこそこ楽しい」と、一見すると佐渡を肯定的に語っているような場面でも、佐渡と「平凡」とを結びつけている。

すなわち、高等教育機関が存在せず、高等学校歴層の流出が自明視されている地方においては、地方にいること自体が、メリトクラシー原理下で「下」であるという、負のラベルとして機能してしまうのである。それを回避するべく、地方の高校生は地理的移動を希求するのである。優秀な者

が都市へ流出し、そうでないものが地方に残るという構造自体は石黒ら(2012)などでも指摘されていることだが、そこから生じる地方部へのネガティブな視線にもまた、同様に関心が向けられるべきだろう。

なお、繰り返しになるが、これらは「地域への語り」であり、進学と関連する形では語られなかった部分である。非高等学校歴者はこうした地方部へのネガティブな意味づけだけでは地理的移動が正当化されず、ゆえに「やりたいこと」を持ち出す、というのが4章の論旨である。また、これについて付言すれば、本章(特に2節)で取り上げた内容は、親や教員をはじめとする周囲の人々には声高に主張できないことが予想される。地方居住者である親や教員を、「下」に位置づけてしまうからである。このことも、非高等学校歴者が進学移動を正当化するために「やりたいこと」を持ち出すという議論を補強するだろう。

## 6. 結論

以上のことから結論できるのは、地方から進学移動する若者は、地方への不満・不安や、地方定住者との差別化への希求から、「地方を出たい」という思いが先にあるということ、そして高い学校歴を取得できる見込みのある者は、進学移動が自明視されているためにそれをそのまま進学動機と結び付けることができるが、そうでない者は「やりたいこと」を持ち出さねば進学移動を正当化できないということ、この二点である。要するに、彼(女)らは、「進学のための移動」ではなく、「移動のための進学」をしているのだが、高い学校歴を取得できない場合には、「やりたいこと」を持ち出すことによって、後者を隠蔽し、前者として正当化するのである。このように考えれば、地方出身の学生が語る「やりたいこと」は、非高等学校歴者が進学移動を正当化する戦略として解釈できる。

「やりたいこと志向」が持つリスク的側面は多々指摘されてきた(児美川 2016など)。そして、本稿が明らかにしたのは、地方の非高等学校歴層の高校生が地理的移動への希求を正当化するために「やりたいこと」を志向せねばならないという状況である。この2点を考えれば、地方出身の非高等学校歴者は、地理的移動というコストとともに「やりたいこと志向」というリスクを背負わされている、ということが出来るだろう。このことが持つ含意について本稿で詳細に検討することは出来ないが、ただ進学率の地域間格差を解消すれば良い、という安直な議論には慎重になりたい。彼

(女)らが行っている進学への意味づけにも配慮した議論がなされるべきである。

さらに言えば、彼(女)らが「進学」に付与している意味のみならず、「地域」に付与している意味についても、より自覚的にならねばならない。教育機会の地域間格差は重要な問題だが、地方からの進学者が増えれば、進学しない(できない)者が残る場所としての地方部へのネガティブな視線は、より強くなるだろう。教育機会の地域間格差の問題性は、単に「教育達成機会」の地域間格差にとどまるのではない。教育達成に伴う居住地の地理的分化が、地方居住者への負のラベリングにつながるのである。

本研究の学術的意義は次の4点にある。1点目は、先行研究が常々指摘してきた、地方出身者が進学する際に直面する困難に注目するのではなく、そうした困難を抱えつつも進学する層に注目した点であり、2点目に、彼(女)らの「進学」への、また「地域」への意味づけに注目した点である。繰り返しになるが、地方からの進学を論じるにあたって、非高校校歴者の進学行動については言及がほぼなされてこなかった。その上、進学機会の地域間格差が問題視されることは多々あったが、その中での意味づけの地域性に注意が払われることはほぼなかった。今後は、彼(女)らに注目して、また彼(女)らの意味づけに注目して、地方からの進学を扱う研究の蓄積に期待したい。

3点目は、地方から都市へ出るということそれ自体に価値を見いだす層の存在を明らかにした点である。これまでは、朴澤(2016)のように、経済合理的に都市へ移動をする層か、石戸谷繁(2004)のように、価値合理的に地方にとどまる層に焦点をあててきた。一方で、本稿が明らかにしたのは、経済的便益が期待できずとも、価値合理的に都市への移動をする層である。「都市＝経済合理的」、「地方＝価値合理的」という安直な二項区分は避けるべきだろう。またあるいは、進学移動を扱う際には、「進学のための移動」としてだけでなく、「移動のための進学」という視点から見ることの重要性を示したと言っても良いかもしれない。この視点からは、地域移動研究との接合も重要になってくる。

そして4点目は、「やりたいこと志向」と、地域を結び付けた点である。これまでの「やりたいこと」研究は、若年無業者や不安定就労者と結び付けられるばかりで、「やりたいこと」の地域性や「やりたいこと」を

志向する若者の地域性を重視してこなかった。本研究は、そうした研究状況にも一石を投じるものである。

## 注

- 1) 進学移動という言葉については、「地理的移動を伴う進学」との意味で使う者もいれば(磯田 2009など)、「進学に伴う地理的移動」という意味で使う者もいる(上山 2014など)。本稿の問題関心は進学行動にあるため、本稿においては、進学移動は「地理的移動を伴う進学」の意で用いる。
- 2) なお、進学行動を扱う研究だけでなく、人口移動との関係で進学移動を扱う研究においても、専門学校(と場合によっては短大)を対象としない研究が多い(磯田 2009; 山口・松山 2001など)のは、甚だ疑問である。
- 3) 質問紙調査は、佐渡市の協力の下で行われた。
- 4) 調査対象者が積極的に調査への協力の意思を持つ者のみになっていることが、なんらかのバイアスを生じさせている可能性は否定できない。もっとも、対象者の属性や同アンケート中での回答傾向が、(佐渡市出身者の中で)特異であるわけではない。
- 5) 離島の定義を離島振興法の対象地域とすると、基本的には本土との間に橋がある島(淡路島など)は含まれない。
- 6) 大学・短大・高等専門学校。これに専門学校を含め、「ポスト中等教育機関」。
- 7) 新潟県立佐渡高等学校(2017)、新潟県立佐渡高等学校相川分校(2017)、新潟県立羽茂高等学校(2017)、新潟県立佐渡総合高等学校(2017)、新潟県立佐渡中等教育学校(2017)

## 文献

- 荒牧草平, 2002, 「現代高校生の学習意欲と進路希望の形成」『教育社会学研究』71: 5-23.
- 有海拓巳, 2011, 「地方/中央都市部の進学校生徒の学習・進学意欲」『教育社会学研究』88: 185-205.
- 濱中義隆, 2007, 「現代大学生の就職活動プロセス」小杉礼子編『大学生の就職とキャリア』勁草書房, 13-32.
- 平沢和司, 2011, 「大学の学校歴を加味した教育・職業達成分析」石田浩・近藤博之・中尾啓子編『現代の階層社会2 階層と移動の構造』東京大学出版

- 会, 155-170.
- 朴澤泰男, 2016, 『高等教育機会の地域格差』東信堂.
- 石戸谷繁, 2004, 「ローカリティを生きる 「郡部校」生徒の進路選択」古賀正義編著『学校のエスノグラフィー——事例研究から見た高校教育の内側』嵯峨野書院, 93-119.
- 石黒 格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子, 2012, 『「東京」に出る若者たち——仕事・社会関係・地域間格差』ミネルヴァ書房.
- 磯田則彦, 2009, 「高等教育機関への進学移動と東京大都市圏への人口集中」『福岡大学人文論叢』41 (3) : 1029-52.
- 岩田 考, 2010, 「進路未定とフリーター」中村高康編著『進路選択の過程と構造——高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房, 184-208.
- 苅谷剛彦・安藤 理・有海拓巳・井上公人・高橋 渉・平木耕平・漆山綾香・中西啓喜・日下田岳史, 2007, 「地方公立進学校におけるエリート再生の研究」『東京大学教育学研究科紀要』47 : 51-86.
- 吉川 徹, 2001, 『学歴社会のローカル・トラック』世界思想社.
- 児美川孝一郎, 2016, 『夢があふれる社会に希望はあるか』ベスト新書.
- 文部科学省, 2017, 「学校基本調査—平成29年度結果の概要— 調査結果の概要 (初等中等教育機関、専修学校・各種学校)」(2017年12月26日取得, [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2017/12/22/1388639\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/12/22/1388639_2.pdf)).
- 中澤 渉, 2011, 「高等教育進学機会の地域間不平等」『東洋大学社会学部紀要』48 (2) : 5-18.
- 新潟県立羽茂高等学校, 2017, 「平成29年度ハイスクールガイド (インターネット版)」(2017年12月26日取得, <http://www.hamochi-h.nein.ed.jp/pdf/H29HSguide2.pdf>).
- 新潟県立佐渡中等教育学校, 2017, 「H29 ハイスクールガイド」(2017年12月26日取得, <http://www.sado-ss.nein.ed.jp/H29%20guide%20ver2.pdf>).
- 新潟県立佐渡高等学校, 2017, 「平成28年度(2016年度)卒業生の進路状況」(2017年12月26日取得, <http://www.sado-h.nein.ed.jp/H29/PDF/H28-sinro.pdf>).
- 新潟県立佐渡高等学校相川分校, 2017, 「平成29年度佐渡高等学校相川分校ハイスクールガイド」(2017年12月26日取得, <http://www.sado-h.nein.ed.jp/H29/PDF/H29-sadohsguide-aikawa.pdf>).

- 新潟県立佐渡総合高等学校, 2017, 「卒業生の進路」(2017年12月26日取得, [http://www.sadosou-h.nein.ed.jp/career\\_guidance/data.html](http://www.sadosou-h.nein.ed.jp/career_guidance/data.html)).
- 旺文社, 2017, 「大学受験パスナビ」(2017年12月26日取得, <http://passnavi.evidus.com/>).
- 佐渡汽船, 2017, 「旅客運賃：朱鷺のいる島 佐渡島 ～佐渡汽船～」, 佐渡汽船：新潟～佐渡 運行情報総合サイト (2017年12月26日取得, <http://www.sadokisen.co.jp/price/price1.html>).
- 鈴木謙介, 2005, 『カーニヴァル化する社会』講談社.
- 富江英俊, 1997, 「高校生の進路選択における「地元志向」の分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要』37：145-54.
- 上山浩次郎, 2014, 「進路行動と地域移動：1990年代以降における関東での大学進学移動に注目して」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』120：111-35.
- 山口泰史・松山 薫, 2001, 「わが国における大学進学移動の動向と変化」『東北公益文科大学総合研究論集: forum21』2：75-95.
- 山下祐介, 2012, 『限界集落の真実——過疎の村は消えるか?』筑摩書房.